



長倉三郎先生の思い出

Keiichi KODAIRA 小平桂一 総合研究大学院大学元学長

長倉先生がお亡くなりになったと伺って、先生にお会いしたときのことが改めて思い出された。99歳の天寿を全うされたのは、いかにも長倉先生らしいとも感じられた。とは言え、私は天文学が専門で、先生とは研究上の交流は全くなく、総合研究大学院大学の関係で二度ほどお会いしただけである。長倉先生のご業績が多々ある中で、総研大の創設学長としてのお仕事は、大きなものの1つだったに違いない。総研大は大学共同利用機関を基盤とするユニークな独立大学院大学である。その詳細や創設の経緯は、長倉先生とお付き合いの長かった廣田榮治先生の寄稿文に詳しいと思われるので、ここでは省かせていただく。

最初に長倉先生にお会いしたのは、1994年に私が総研大の天文科学専攻の専攻長になって、長倉学長に挨拶に伺ったときであった。そのときは総研大の本部がまだ東京工業大学の長津田キャンパス内に置かれていて、初対面の私に大変丁寧に総研大の説明をして下さった。それと言うのも、国立天文台長になって自動的に専攻長となるまでは、私は東京大学理学部教授を併任していて、総研大の教育には全くタッチしてきておらず、長倉学長にも面識がなかった。国立天文台自体は、総研大発足の3年後に天文科学専攻として学生受け入れを開始していたので、先生はこの「新入り専攻長」に大学共同利用機関の研究現場で博士課程教育を行うこの独特な独立大学院大学のメリット・デメリットを詳しく説明して下さいました。私はといえば、ただただ恐縮して拝聴していたが、帰り際に先生から「すばる望遠鏡」計画の進捗状況を尋ねられて、「建設が始まっている」旨、簡単にお答えした。そのときの長倉先生の丁寧なお話しぶりと優しいご様子が強く印象に残っている。

二度目にお会いしたのは10年後の2004年で、長倉先生は日本学士院長の職に在られ、私は総研大の学長を務めていた。初夏の頃だったと思うが、副学長の高畑尚之先生と一緒に、上野の学士院の院長室に先生をお尋ねした。私は6年間専攻長を務めた後、2001年からは学長として総研大の運用に関わってきていたので、ユニークな国立大学としての総研大のメリット・デメリットは十分に^{わきま}弁えていたつもりだった。ところが2004年に国立大学が法人化された際に、総研大と基盤機関の大学共同利用機関が別々の法人になってしまった。創設時から、総研大も基盤の大学共同利用機関も同じく国の直轄組織だったので、いわば「同じ袋の中」で研究教育と大学運営がなされてきた。ところが法人化は、長倉先生が構想されていた「専攻基盤と大学本部一体の独立大学院大学」を分離解体し、新たな課題をもたらす事態となってしまった。それが総研大の創設学長であられた長倉先生にお会いしに上野の学士院に伺った背景だった。先生はとくにこの状況はご存じで、心配されておられると人づてに伺っていたが、その気配は全くお見せにならず、一応私どもの話をお聞きになった後は、我々を精養軒のランチにお招き下さり、温厚にして快活、^{ゆうよう}悠揚^{ゆうよう}迫らぬ雰囲気^{ういき}で私たちを勇気づけて下さった。私としては、ややホッとしたような、気抜けしたような気分だったことは否めないが、それ以上に長倉先生の「レジリエンス(弾性力)」に多くを学び、元気づけられて上野を後にした。

お会いしたのは以上の2回限りだが、総研大の生みの親・長倉三郎先生とのこれらの出会いは、私にとって忘れがたい思い出である。

© 2021 The Chemical Society of Japan